慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	孔子批判の根底にあるもの：一九七三年の「批林批孔」運動を中心に
Sub Title	
Author	林, 嘉言(Hayashi, Yoshikoto)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾創立一二五周年記念論文集：法学部一般教養関係 (1983. 10) ,p.167- 205
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BN01735019-00000003-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

孔子批判の根底にあるもの

——一九七三年の「批林批孔」運動を中心に——

林　嘉言

第一章　問題の所在

当初、第二の文革[1]に発展するのではないかと注目された「批林批孔」運動は、中共当局の宣伝機関の総力をあげてのキャンペーンにもかかわらず、比較的短期間に、しかも明確な「成果」をおさめることなく、急速に収拾された[2]。

一九七三年後半に始まったこの政治運動は、林彪事件以後すでに二年の歳月が過ぎ、林彪系の残存勢力もほぼ一掃されつつあった状態で起こったのである。また、二千余年前の中国の歴史上の人物である孔子をなぜ林彪批判と結びつけて「批林批孔」運動とし、それを政治キャンペーンとして展開しなければならなかったのであろうか。中国政治の特徴を理解する上で、この政治運動は極めて注目に値するものであるといえる。

今日の中国の公式文献においても、毛沢東がこの「『批林批孔』運動の展開を承認した[3]」と記されている。それゆえに、当初言われていたように、この政治運動は「毛主席がみずからおこし、その指導のもとで[4]」おこなわれた

ものであるということは、ほぼ間違いないであろう。また、この運動の性格については、「マルクス主義を堅持し、修正主義に反対する政治闘争、思想闘争である」[5]と位置づけられている。このように、それが毛沢東みずからおこした思想闘争であるからには、そこにはおのずと毛沢東の政治理念が内包されており、また政治闘争である以上、当然闘争の対象が実在することになる。

周知のように、中国で行われる各種の思想闘争は、現実の政治闘争と深くかかわっている。「批林批孔」運動も非学術的な政治闘争である以上、この運動を解明するうえで最も重要なことは、孔子や林彪の思想を代表する著作を分析することよりも、むしろこの運動が展開された背景と目的が一体何であったかを究明することである。

本稿は以上述べた問題意識をもとに、極めて広範かつ多様に展開された「批林批孔」運動のなかから、毛沢東と林彪が対立に及んだ根本的原因を求め、それが孔孟の道といかなるかかわりがあったのかをこの政治運動の時期に発表された文献を中心に分析し、あわせて孔子批判の必然性および林彪批判との結合の論理と目的を解明することにする。

第二章　毛沢東・林彪の対立

第一節　対立の始まり

中国共産党第九回全国代表大会は、今日ではその「思想的、政治的、組織的指導方針はいずれも誤ったものである」[6]と否定されているが、当時は「文革の勝利を宣言するとともに『後継者林彪』を定めたことが最大の特徴」[7]であった大会として評価されていた。

九全大会後公表された党規約の中で、林彪は毛沢東の「親密な戦友」、正式の後継者であることが明記された。[8] その林彪がなぜ毛沢東に反旗をひるがえすことになったのか、両者の対立はいつ頃から始まったのかをまず明確にする必要があると思われる。なぜなら、それによって両者の対立の原因が一層明らかになるからである。

すでに述べたように、九全大会の党規約に林彪が毛沢東の正式の後継者として指定されていることから、毛沢東・林彪の対立は九全大会以後であると考えられるのが一般的であろう。しかし、果たしてそう言いきることができるかどうかは大いに疑問のあるところである。なぜなら、九全大会から九期二中総会まではわずか一年四ヵ月の短期間であり、林彪と陳伯達が急に結託して、毛沢東に対し「突然の襲撃」[9]を加えることは、想像しがたいからである。また、林彪は九全大会で毛沢東に次ぐ唯一人の党副主席となり、[10] 後継者としての地位を正式に与えられていたのであるから、行動面においてより慎重にならざるを得ない筈であった。それにもかかわらず林彪が毛沢東に対し、急に敵対的態度を取るようになったのは一体何が原因であったのであろうか。われわれにはその原因を九全大会以前にさかのぼって解明する必要があるように思われる。そうすることによって初めて両者の対立の根本的原因の一端を窺い知ることができるからである。

毛沢東は一九六六年七月八日付けで江青に書簡を送り、林彪に対する不満を「私は彼（林彪）の圧力によって梁山に追いあげられ、心ならずも彼の意見に従わざるを得なかった」[11]と述べている。このことは、毛沢東と林彪の間に早くから対立のあったことを示唆するものである。また、林彪事件発生後中共中央が当時の「批林整風」の資料として中共幹部に配布した学習文件のなかでも、「九期二中総会以前から、林彪反党集団はすでに党を奪い、権力を奪取する陰謀活動を行い、毛主席を始めとする党中央の打倒を企てていた」[12]と述べられている。さらに、同じく中共中央の幹部学習文件「中発（一九七三年）三四号」も、林彪の反動的思想の根源について、「林彪が党に叛き

国に叛いたのには歴史的根源がある。林彪は大地主兼大資本家の家庭に生まれ、入党後もブルジョア世界観は改造されはしなかった」[13]と述べ、九全大会以前の時期まで歴史的にさかのぼり、林彪の反党反毛沢東思想のブルジョア的世界観を跡づけようとしている。

このような叙述を裏付けるかのように、周恩来は中共十全大会における報告のなかで、林彪の反党的陰謀についてつぎのように述べている。「林彪というこのブルジョア階級の野心家、陰謀家、二面派はわが党内で、十数年ではなくて数十年も陰謀をめぐらしてきたのであるが、かれには発展の過程と暴露の過程があったし、われわれにもかれにたいする認識の過程があった」[14]と。また、「紅旗雑誌社」が発行したものであると言われている「読者の十全大会についての質問に対する返事」と題するパンフレットのなかで、「両面派（林彪）の党内における陰謀は幾年も前からあったものではなく、幾十年も前からすでに企んでいたものであり、九全大会後、林彪の党における地位がますます高くなるにつれ、野心も大きくなったので、公然と飛び出すようになり、毛主席の指導的地位を打倒しようとしたのである」[15]と述べている。すなわち、林彪の反毛沢東、反社会主義の思想的根源は、入党以前からあったが、党内における地位がナンバー2になるまでそれを公然と表わさなかったということを、中共当局は強調しているのである。

以上の分析から、政治の表舞台に現われた毛・林間の「親密な戦友」のポーズとは裏腹に、両者の葛藤はかなり早い時期から存在していたということになる。この観点から考えるなら、九全大会において林彪が毛沢東の正式の後継者に選ばれたのは、文化大革命の混乱期に軍権を握っていた林彪の勢力が急速に増大したことによるものであり、それは毛沢東の不本意とするところであったと考えられる。

そこで、毛・林の対立の背後にあった林彪の反党・反毛沢東の政治的思想と罪状がいかなるものであったかをみ

ることにする。

第二節　林彪の罪状

林彪が公開に批判されるようになってから、「本も読まず、新聞も見ず、文献も読まない……、なんの学問もない大党閥・大軍閥」[16]、劉少奇と同じ「野心家、陰謀家、二面派、あくまでも悔い改めない資本主義の道を歩む実権派」[17]というレッテルを貼られるようになった。毛沢東の親密な戦友、後継者から一転して、極悪の徒として批判の矢面に立たされた林彪は、当然無数の罪状[18]を背負う反革命分子とならざるを得なかった。林彪に課された罪状は多方面にわたっていたが、それらの主要なものを国内問題と国外問題に分けて整理してみると、つぎの通りである。

(A)　国内問題

(1)毛沢東暗殺および党分裂の企み。周恩来は十全大会の報告のなかで、「かれ（林彪）は、一九七〇年八月第九期中央委員会第二回総会で反革命クーデターをおこして未遂に終わり、一九七一年三月反革命武装クーデター計画『「五七一工程」紀要』をつくり、九月八日反革命武装クーデターをおこして、偉大な指導者毛主席を謀殺し別に中央をつくろうとするところまでつっ走った」[19]と述べている。また、中共中央専案組が発表した「林彪反党集団の反革命的罪状についての審査報告」は、「早くも九全大会前後において、林彪は身近な者を召集し、私党を結集し、彼の妻葉群とぐるになり、陳伯達、黄永勝、呉法憲、李作鵬、邱会作らと結託して、林彪を頭目とするブルジョア司令部を結成した」[20]と述べている。党の一元化指導を絶対視する毛沢東にとって、林彪の「ブルジョア司令部」の結成は党の分裂を企むことに外ならなかった。同審査報告は、林彪の党分裂の陰謀について、「彼ら（林彪反党集団を指す）の陰謀が実現しえないとなると、林彪はまた呉法憲に飛行機を調達するよう通知を出し、黄永勝、呉法

憲、葉群、李作鵬、邱会作らとともに、一路南の広州に逃れてもう一つ中央をうちたて、いわゆる『南北朝』の局面をつくり出そうと妄想した[21]」と主張している。

(2)国家主席の地位の奪取。中華人民共和国の国家主席にどれだけの実権があるかは別として、それは少なくとも国を代表する最高の地位である。かつて人民公社・三面紅旗・大躍進政策の失敗により、毛沢東はこの地位を劉少奇に譲らざるを得なかった苦い経験を味わった。この経験を踏まえて、九全大会後間もなく開催を予定していた第四期全国人民代表大会で、新憲法において「国家主席」を正式に廃止することを決める準備が進められていた。この新憲法草案が九期二中総会に提出されるや、林彪と陳伯達の反対にあったのである[22]。「林彪は国家主席になるのに急で、党を分裂させ、毛主席の中央から権力を奪おうとしたのであり、その性質は一つの粉砕された反革命政変である[23]」と断罪された。林彪らの国家主席を設けるべきであるとの論理として使われた「国家にかしらがなければ、名正しからず、言したがわず[24]」は、孔孟の道にその思想的根拠を求めたものであるとして非難された。

(3)プロレタリア階級独裁の政権転覆を計った。毛沢東は、プロレタリア階級独裁の機能をつぎのように考えていた。「一つは国内の反動階級、反動派、および社会主義的改造と社会主義建設に反抗するものを抑圧することであり、もう一つは国外の敵の侵略と転覆活動を防ぐことである[25]。」すなわち、プロレタリア階級独裁は毛沢東にとって、中国で社会主義革命と社会主義建設をおこなううえで不可欠の手段であった。この観点にもとづいて毛沢東は、林彪の反プロレタリア階級独裁の思想的根源として、つぎのように指摘している。「林彪は、孔子の『徳』、『仁義』、『忠恕』という一連の謬論をうけ売りするとともに、それに史的唯物論のレッテルをはりつけ、これを使ってプロレタリア階級独裁を攻撃した[26]。」また林彪は、「『徳を恃む者は昌え、力を恃む者は亡ぶ』とわめき立て、プロレタリア階級独裁は『暴政』だ、『独裁』だとそしり、すでにうち倒された地主分子、富農分子、反革命分子、悪

質分子、右派分子などの妖怪変化に『仁政』を実施するよう要求した。林彪は孔子と同じように、滅亡にひんした反動階級の代弁者であった[27]」のである。さらに、林彪の反プロレタリア階級の狙いについて「『迫害を受けた』人人を『解放』し、彼らに再び権力を与えようとする目的は、資本主義を復活し、地主ブルジョア階級のファシスト独裁でプロレタリア階級独裁に取りかえようとする[28]」ものであると非難された。

(4)党の基本路線である継続革命に対する反対。林彪は、生産手段の所有制の面で社会主義的改造が基本的に成しとげられたのちひきつづき社会主義革命をおこなうことは、「極左」であり、孔子の「中庸の道」にそむくものである[29]、と主張したといわれている。「中庸の道」とは、「偏ラズ倚ラズ」という意味で、それは「階級対立のまっ消、超階級的な観点の宣揚にほかならない[30]。」また、林彪が強調していた「両者が相い戦えば共に恨み、両者が和解すれば共に友となる（両闘皆仇、両和皆友[31]）」という論理は、党の基本路線であるプロレタリア階級独裁のもとでの継続革命に反対するものであった。

(5)社会主義の新しい事物に対する反対。中共当局の論理によれば、「プロレタリア階級文化大革命を肯定するか、あるいは否定するか、社会主義の新しい事物を積極的に支持するか、あるいは疑いをいだきあざ笑うかは、二つの階級、二つの道、二つの路線の闘争の深刻な表われ[32]」であった。これに対し、「林彪はすべての搾取階級の代表的人物と同様、文化大革命にたいし極端な憎しみをいだいていた。かれは大口をたたき、中庸の道は『道理にかなったもの』であるといって、文化大革命に悪どい攻撃をくわえ、文化大革命のなかで現われてきた新生の事物を攻撃し、すばらしい情勢をお先真っ暗だといいくるめ、今は昔に及ばないという反動的言論をまきちらし、中庸の道を、自らが反革命クーデターを起こし、プロレタリア階級、プロレタリア文化大革命にたいし巻き返しをする理論的支柱とした[33]。」「社会主義の新しい事物に極力反対する林彪の修正主義路線と孔孟の道は、新しい事物が発展・強

大化するうえでの大きな障害」[34]となったのである。

(B) 国外問題

林彪はソ修社会帝国主義に投降しようとした。周恩来は十全大会の政治報告のなかで、林彪とソ連および各国反動派との関係について、林彪は「ソ修社会帝国主義に投降しようとし、帝国主義、修正主義、各国反動派と連合して、中国に反対し、共産主義に反対し、革命に反対した」[35]と述べている。また、林彪のソ連との関係を孔子批判と結びつけ、「林彪反党集団が儒家の道徳をさかんに宣伝していたとき、ソ修裏切り者集団もはるかかなたから呼応し、密接に協力した」[36]と非難した。

以上、林彪の罪状を毛沢東派によって発表された文献に基づいて、国内、国外の両面から整理してみた。そこで、つぎに林彪に課せられた罪状との対比の意味をも含めて、林彪の毛沢東個人および毛沢東路線に対する批判を、毛沢東派によって発表された文献を整理することによって明らかにし、彼らの林彪断罪の意図を究明することにする。

第三節　林彪の毛沢東批判

林彪事件発生後、毛沢東の林彪批判はかなり慎重な段取りで行われた。林彪が文化大革命の中で、党、政、軍の各方面で急速に勢力を拡大した結果を無視するわけにはいかない状況に置かれていた毛沢東としては、林彪事件をただちに公表することはできなかった。

十全大会後、林彪が正式に名指しで批判される前に、中共中央は幹部に対し、数回に分けて林彪の反毛・反党資料を極秘裏に配布し、学習の材料とした。そのなかには、林彪反革命クーデター計画書と言われる「五七一工程紀

要」と林彪の『黒いノート』が含まれていた。

はじめに、「五七一工程紀要」についてであるが、同文献は林彪死亡後毛沢東派が林彪を断罪する目的で幹部に配布したものである。それゆえに、同文献の信憑性については、さまざまな憶測があった。[37] しかしその後、中共当局が発表した林彪批判の正式文献では、大部分が同紀要から引用されている。また、「林彪・四人組反革命集団」裁判においても、同紀要は重要な罪状の証拠の一つとして採用されている。[38] 要するに、「五七一工程紀要」はその信憑性について釈然としないものがあるものの、中共当局がそれを林彪断罪の正式文献として採用している以上、そこにこめられた中共の政治的意図を探る文献として価値がある。そこでこの文献を毛沢東個人に対する批判と毛沢東路線によってもたらされた国内政治の混乱に対する批判の両面から要約してみると、およそつぎのようになる。

第一の毛沢東個人に対する批判についてみると、彼は真のマルクス主義者ではなく、孔孟の道を行う、秦の始皇帝と同じ封建的暴君である。毛沢東の継続革命論は、彼と意見を異にするすべてのものに対する闘争の論理であり、そのめざす社会主義とは、社会ファシズムの封建専制国家である。毛沢東は人間の相互不信を駆立て、武装闘争をあおりたてて、人民大衆の相互惨殺により支配者としての地位を確保しようとしている。要するに、毛沢東は懐疑狂、虐待狂であり、人間性に欠け、道徳観のない封建専政の独裁者である。

つぎに、毛沢東路線によってもたらされた国内的矛盾についてみると、支配階級は腐敗無能であり、ひとつかみの青二才が権力を奪取し、横行濶歩している。また、政局は不安で、経済は停滞し、人民大衆の不満は頂点に達し、政治危機が異常に高まっている。文革の結果、幹部は打撃を受け、農民の生活は一層苦しく、いわゆる文革の新しい事物とは、形を変えた労働改造であり、失業状態であり、搾取の現われである。

それではつぎに、「林彪一味が党の九全大会後から、九期二中総前にかけてメモしたものである」[39]と言われ、「かれ（林彪）の多年にわたる反革命の経験の総括であり、概括でもある」[40]と非難された「黒いノート」を検討してみることにする。

林彪の「黒いノート」とは、「中共中央中発（一九七四）一号文件—北京大学・清華大学選編「林彪与孔孟之道」（材料之一）」[41]であって、党幹部に「批林批孔」運動の参考資料として配布されたものである。この文献の内容の信憑性についても、「五七一工程紀要」と同様、多くの疑問がある。なぜなら、「黒いノート」のなかで言及されている多くの証拠物件は公表されておらず、当事者もすでに死亡しており、弁解することもできないからである。しかし、中共当局がそれを正式に批判材料として取扱っている以上、この文献を分析することは、「五七一工程紀要」同様の意義があるものと思われる。

同文献がかなり長いものであるため[42]、便宜上『紅旗』一九七四年第五期に掲載された余凡署名の「林彪反革命策略の破産—一冊の黒いノートを批判する」のなかで同文献を重点的に批判している部分と、東方書店出版の『孔子批判』の「批林批孔関係年表」[43]を参考に、時間の前後に従って「黒いノート」の内容をつぎのように整理してみた。

(1) 一九六〇年一〇月、林彪は「両者が相い戦えば共に恨み、両者が和解すれば共に友となる」を唱え、ソ修の反中国、反共、国際共産主義運動の分裂化に呼応した。

(2) 一九六二年、林彪は「天馬空を行き、独り往き独り来たる」の掛軸をかき、寝室に掛けた。

(3) 一九六二年、林彪は総路線、大躍進、人民公社は「ゆきすぎ」であり、個人の積極性を損なったと攻撃した。

(4) 一九六三年、林彪は「忍耐、大度の科学的根拠」、「区々たる小人、区々たる小事のために、なんでわが終身の

大事を誤らせてよいものか」と書く。彼はまた、蘇軾の「留侯論」から「匹夫辱に見（まみ）え、剣を抜きて起ち、身を挺して闘うは、これを勇と為すに足らざるなり。驟然これに臨みて驚かず、故無くこれに加えて怒らず」の一節をうつし、枕頭にかけた。

(5)一九六四年、林彪は葉群に「わたしはいつも、朱子のように人に対したいと思っている」と語った。

(6)一九六六年、林彪は「漢朝に百家を廃し、独り儒術を尊んだ人間に董仲舒がいる。わたしはみんなが董仲舒になることを願う」と言った。

(7)一九六九年一〇月一九日、林彪は「悠々たるかな万事、唯だ此を大と為す、己に克ちて礼に復る」の掛軸二本を書き、妻の葉群に贈り、これを「当務の急となす」よう戒めた。

(8)一九六九年一〇月、林彪は「徳を恃む者は昌え、力を恃む者は亡ぶ」と掛軸に書き、葉群に与えた。

(9)一九六九年冬、林彪は「王者は周文より高きは莫し……」の掛軸を書いて寝室に掲げ、自ら「人主」と称し、周「文王」になぞらえた。

(10)一九六九年、林彪と葉群は「儒家の学説は史的唯物主義であり、儒家の徳、仁義、忠恕は礼記、四書、古文詩詞にその源を発し、人間関係を処理する上での準則である」とノートに書いていた。

(11)一九七〇年一月一日、林彪三たび「悠々万事、唯此、唯此為大、克己復礼」の掛軸を書き、「唯此」を強調した。

(12)一九七〇年三月、林彪はその一党に「韜晦」の二字をノートに書きしるさせ、自分も『三国演義』にある劉備が「韜晦の計」で曹操をだます詩、「虎穴に暫く身を棲くことに勉め、英雄を説き破りて人を驚殺す、巧みに雷を聞くを借りて掩飾し、機に随い変に応ずると信に神の如し」を書きうつした。

(13)一九七〇年五月、林彪はその一党に自分が「国家のかしら」になる、「国家にかしらがなければ、名正しからず言したがわず」といわせた。

要するに、この「黒いノート」を見る限り、毛沢東派は林彪の価値観を儒教の強い影響によって形成されたものであると断定し、「批林批孔」運動の過程で強調されたように、林彪事件以前の時期にすでに儒教的思想の根源があったと主張している、ということである。

以上二つの文書を通じて明らかになった林彪批判にこめられた毛沢東派の意図は、林彪の毛沢東批判の内容を公表することによって、林彪が中国の社会主義革命に長年身を投じていながら、いまだに中国の伝統的儒教思想から脱皮できなかったことを暴露することにあった。そして、林彪がこのような世界観の持主であるがゆえに、彼は毛沢東個人を非人間的な独裁者と見なし、毛沢東の社会主義革命路線によってもたらされた矛盾を厳しく批判した、ということである。

それでは、林彪の世界観を孔孟の道に深く影響されたものであると批判し、「真のマルクス主義者」と自称していた毛沢東自身は、はたして儒教と無関係であったのであろうか。

第三章　孔孟の道と階級闘争

第一節　毛沢東と孔孟の道

毛沢東は晩年よく彼の書斎で外国の賓客と会見した。そこには多くの中国古典の和綴本が積み重ねられていた。毛沢東がかなりの中国古典を読破していたことは、彼の多くの著作と詩詞のなかから窺い知ることができる。

蕭三は、毛沢東の少年時代について、毛が私塾で四書五経を教わり、読み書きをおぼえると、中国の民間小説である『精忠伝』、『説唐』、『西遊記』、『封神演義』、『水滸伝』、『三国演義』などを読みあさったことを伝えている。[44] そのような関係から毛沢東は、彼の著作のなかでしばしば古典を引用している。当然のことながら、それらのなかで孔孟の哲学思想を代表する「論語」、「孟子」の引用もかなりの数にのぼっていた。[45] また「五七一工程紀要」も、毛沢東を「真のマルクス・レーニン主義者ではなくして、孔孟の道を行い、マルクス・レーニン主義の皮を借りて、秦の始皇の法を執行する、中国歴史上最大の封建的暴君である」[46]と批判している。

毛沢東自身もかつて「こんにちの中国はこれまでの中国の発展であり、われわれはマルクス主義的歴史主義者であって、われわれは歴史を切断してはならない。孔子から孫中山にいたるまでを総括して、この貴重な遺産をうけつぐべきである」[47]と述べ、伝統文化の「批判的継承法」を主張したことがある。それでは、毛沢東の孔孟の道に対する基本的考え方はいかなるものであったのであろうか。

四人組主宰の『学習と批判』は、毛沢東の反孔闘争についてつぎのように述べている。「偉大な指導者毛主席は五四運動時期にはすでに『打倒孔家店』の戦闘の最前線にいた」、「かれはマルクス・レーニン主義を思想的武器として、孔孟の道に対し極めて厳しい批判を加えるとともに、この種の批判を反帝反封建の闘争と密接に結びつけ、批孔闘争のなかでマルクス・レーニン主義を広め、人民の徹底した反帝反封建の革命を喚起した。」[48]すなわち、ここでは毛沢東が五四運動以来、一貫して孔子批判の先頭に立っていたということである。

かつて毛沢東は、一九三九年五月四日延安における青年大衆の五四運動二〇周年記念集会で講演し、そのなかで延安の青年が労働に参加していることを誉め称えると同時に孔子を批判し、つぎのように述べている。「孔子が学校をひらいたとき、その学生は多く、『賢人七十、弟子三千』、まことにさかんであった。だが、その学生は、延安

にくらべるとはるかにすくなかったし、しかも生産運動などはこのまなかった。……中国の古代、聖人のもとで勉強していた青年たちは、革命の理論を学んだことがなかったばかりか、労働もしなかった[49]」と。彼は、延安の青年達が孔子学団の弟子達よりもはるかに優れた教育を受けていることを示唆し、間接的に孔子の教育方針を批判した。また、一九四〇年一月の「新民主主義論」のなかで、毛沢東は「中国にはまた半封建的文化がある。それは半封建的政治と半封建的経済を反映したものであり、孔子をたっとび四書五経を読むことを主張し、旧倫理と旧思想を提唱し、新文化、新思想に反対する人びとは、みなこの部類の文化を代表するものである。帝国主義的文化と半封建的文化は非常に親密な兄弟であり、文化の面で反動同盟を結び、中国の新文化に反対している。この部類の反動文化は、帝国主義と封建階級に奉仕するものであり、うちたおされるべきものである。こういうものをうちたおさなければ、どんな新文化もうちたてられない[50]」と述べている。このように毛沢東は、孔孟の道の代表的な書物を反動文化の元凶と見なし、それを打倒してこそ新しい文化がうちたてられると考えていた。このほかに、毛沢東は一九五五年山東省曲阜県のある農業生産協同組合についての調査報告にたいする評語のなかで、「現在の社会主義がたしかに史上比類のないものだということを立証している。社会主義は孔夫子の『経書』にくらべて、なん倍よいかわからない[51]」と述べ、社会主義の優越性を称賛し、暗に孔子の『経書』を批判していた。

以上列挙した数々の例から見る限りでは、毛沢東は確かに徹底した反孔論者であった。しかし、毛沢東の孔子に対するいま一つの側面も決して無視できるものではない。確かに毛沢東は、「尊孔読経」に対して、意識的に徹底した批判の態度を示しているが、孔子を「貧農の出身であり」、「幼少の時から、大衆の間に育ち、ある程度は大衆の苦しみを理解していた」、それゆえに、われわれは教育面においては、「孔子さまの伝統を捨ててはいけない[52]」と述べ、部分的にではあるが孔子を評価している。また毛沢東は、「哲学の問題についての講話」のなかで、「孔子は

『仁とは人なり、仁とは人を愛するなり』といったが、どんな人を愛するのか？すべての人か？そんなことはあり得ない。搾取者を愛するのか？それはできても、不完全なものだ。搾取者の一部のものを愛するだけなのだ。そうでなければ、なぜ孔子は高い官職につけなかったのか？人びとがかれを必要としなかったからだ。孔子はかれらを愛し、かれらを団結させようとした。しかし、食糧が絶たれそうな騒ぎになった。『君子、固より窮す』。ほとんど命を落とさんばかりだった。匡人がかれを殺そうとしたからである」、「孔子はかなり民主的であり、かれは男女の恋愛の詩も収めている」[53]と述べている。この部分は『毛沢東思想万歳』に収められている。このように、未公表の文献に収録されている毛沢東のなにげなく話した言葉のなかから、彼の孔子に対する本音の一端を窺い知ることができるのである。このような毛沢東の未公開の言論は、意図的に公表された文献よりも彼の心情を的確に表出していると考えられる。

このように、毛沢東は孔子を部分的に評価しているばかりでなく、行動面においてもそれを裏付ける事実が過去にあった。たとえば、毛沢東はエドガ・スノーに対し、一九一九年天津から南京へ行く途中、わざわざ曲阜で下車し、孔子の墓を見学し、大成殿の側にあった孔子が自ら植えたといわれている古樹をながめ、孔子の弟子達が足を洗った小川、孔子が幼年時代を過ごした村、顔淵が住んだことのある川岸と孟子の生まれ故郷を見学し、泰山に登った二十年前の楽しい思い出を語り、このはじめての北部遊覧は「私の湖南における経験と徒歩旅行に匹敵する成果であった」と回想している。[54]

また、儒教の基本的徳目の一つである「孝」を、毛沢東が青少年時代によく遵守し、称賛されたことのある記録も残されている。たとえば、毛沢東は「しばしば激しく衝突した父親にたいしても、少しは親思いの気持が働いていた。」[55]さらに蕭三によると、「毛沢東同志は大変に自分の母を愛し、お母さんに対し親孝行であった。かれは一貫

してお母さんにはおとなしく、素直であり、至れり尽くせりの世話をした。お母さんのすべての美徳は、毛沢東同志に大きな影響を与えた」[56]と述べている。真のマルクス主義者を自認している毛沢東が、一九五九年六月、三十二年ぶりに湖南の故郷韶山に帰ったとき、父母の墓参りをし、深々と頭を下げたということも[57]、儒教の孝道の影響があったことの現われであると思われる。

このように、毛沢東もかつては孔孟の道の影響を受け、日常の言動のなかで、無意識的に中国伝統の儒教的思想を部分的にではあるが是認している。自分自身が孔孟の道の影響を受けているからこそ、彼は誰よりも中国で社会主義革命を遂行するには、どうしても古い伝統思想を一掃しなければならず、この任務が果たされないことを痛感していたのである。

それでは、なぜ中国伝統の儒教思想が社会主義革命の障害となるのであろうか。このことは毛沢東の階級闘争観と密切に結びついているのである。

第二節　毛沢東の階級闘争観

今日中共は、毛沢東の晩年の誤ちについて、「社会主義社会の階級闘争にかんする理論と実践の面で、毛沢東同志の誤りはますますひどくなった」[58]と批判している。確かに毛沢東は、とくに晩年において、社会主義社会における階級闘争に固執した。そもそも毛沢東は、中国革命の初期から、マルクス・レーニン主義の階級闘争理論を受容し、それが中国社会を絶え間なく発展させ、共産主義社会に到達するためのもっとも重要な手段の一つであると考えていた。すでに多くの論者が毛沢東の階級闘争観について論じてきた。したがって、ここでは彼の階級闘争観と伝統思想との関係に限定し論じてみたいと思う。

一九五七年二月二十七日、毛沢東は最高国務会議第十一回拡大会議の席上で、「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」と題して講演を行い、階級闘争についてつぎのように述べている。「わが国では、社会主義的改造が、所有制の面では基本的になしとげられ、革命の時期における大規模な、あらしのような大衆的階級闘争は基本的に終わりをつげたが、しかし、くつがえされた地主・買弁階級の残存分子はまだ存在しており、ブルジョア階級もまだ存在しており、小ブルジョア階級はやっと改造をはじめたばかりである。階級闘争はまだ終わってはいない。プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだの階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだのイデオロギー面での階級闘争は、なお長期にわたる、曲折したたたかいであり、ときにはひじょうに激しいものでさえある。プロレタリア階級は自己の世界観にもとづいて世界を改造しようとするし、ブルジョア階級も自己の世界観にもとづいて世界を改造しようとする」[59]と。彼はここで階級闘争の存続と必要性を強調している。また、一九六二年八月、毛沢東は北戴河の中央工作会議と九月の党の第八期中央委員会第十回総会で、社会主義の全歴史的段階における党の基本路線について、「社会主義社会は相当長期にわたる歴史的段階である。社会主義というこの歴史的段階においては、なお階級、階級矛盾と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在し、資本主義復活の危険性が存在する。このような闘争の長期性と複雑性を認識しなければならない。警戒心を高めなければならない。社会主義教育をおこなわなければならない。階級矛盾と階級闘争の問題を正しく理解し、処理し、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し、処理しなければならない。さもなければ、われわれのこのような社会主義国は、その反対の側にむかい、変質し、復活があらわれることになる。われわれはいまから、この問題について、毎年語り、毎月語り、毎日語って、比較的はっきりした認識をもち、マルクス・レーニン主義の路線をもたなければならない」[60]と述べている。

毛沢東は、同じく党の第八期十中総会で、国際的・国内的なプロレタリア階級独裁の歴史的経験を総括し、社会主義の全歴史的段階における基本路線を提起し、「絶対に階級と階級闘争を忘れてはならない」[61]と呼びかけている。すなわち、毛沢東は、党内で起こった度重なる路線闘争を階級闘争と結びつけ、「階級社会において、路線闘争は常に階級闘争と緊密に連結する」[62]ものであり、「矛盾の普遍性と絶対性を認めるか否か、階級闘争と路線闘争の長期性を認めるか否か、これはマルクス主義と修正主義を区別する重要な目じるし」[63]であると考えていたのである。このように、毛沢東はマルクス主義の観点にもとづき、「人類社会の文明史は階級闘争史である」[64]との考えを堅く信じ、「プロレタリア階級政党内部の二つの路線の闘争は、党の隊列を純潔にし、党の団結を強化し、党の戦闘力を高め、党の力量を壮大にし、プロレタリア政党の発展をおし進める力である」[65]とみなしたのである。

社会主義改造が完成した後の中国に、厳密な意味での敵対的「階級」や「階級闘争」が存在していたか否かは大いに疑問のあるところであるが[66]、毛沢東のこのような社会主義社会における階級闘争の認識は、当然彼の現実政治に対する態度を導き出す。「国家とは、階級が階級を抑圧する暴力的手段であり、敵対階級に対して言うなら、それは決していかなる『仁慈』なものではない。超階級的な『仁政』はありうるものではない。」[67]それゆえに毛沢東は、革命政権に「いつくしみがない」と批判を受けたとき、「『きみたちにはいつくしみがない』。まったくそのとおりである。反動派、反動階級の反動的な行為にたいしては、われわれはけっして仁政をほどこしはしない」[68]と反駁した。

このような現実の革命に対する毛沢東の態度は、「革命は、客をごちそうに招くことでもなければ、文章をねったり、絵をかいたり、刺しゅうをしたりすることでもない。そんなにお上品で、おっとりした、みやびやかな、そんなにおだやかでおとなしく、うやうやしく、つつましく、ひかえめのものではない。革命は暴動であり、一つの階級が他の階級をうちたおす激烈な行動である」という「湖南省農民運動の視察報告」の主張までさかのぼること

ができる。[69] 毛沢東のこのような革命の認識において人間性を求めるとするなら、「階級社会においては、階級性をもった人間性があるだけで、超階級的な人間性などというものはない」[70]ことになる。このように超階級的な人間性を否定することになると、道徳の範疇に属する善悪観もおのずと「階級が異なれば、その善悪観も異なってくる。搾取階級が善とみなしているものは、被搾取階級にとっては悪にほかならない」[71]ということになる。したがって、「マルクス・レーニン主義の階級闘争学説は、孔孟の道とは両立できない」[72]という結論に到達する。『共産党宣言』が言う「共産主義革命は、伝来の所有諸関係との最も徹底的な絶縁である。だから、この革命の発展過程で伝来の思想と最も徹底的に絶縁するのは、不思議ではない」[73]ということになるのである。

要するに、毛沢東のこのような革命観は、どうしても徳治を基礎とした孔孟の道とは共存することができなくなる。毛沢東は中国伝統の儒教思想の影響を受けていたにもかかわらず、決して積極的にそれを現実の政治に反映させようとしなかったばかりか、かえって社会主義国家を建設するうえで、伝統的儒教思想を足枷と見なした。このことは、民国初期に中国の知識階級が古い伝統の洗礼を受けながら、「打倒孔家店」を積極的に展開したことと一脈通じるものがあるように思われる。

毛沢東にとっては、伝統的孔孟の道をそのまま存続させることは、彼がおし進めている継続革命路線の遂行を不可能にし、現存の社会主義は徐々に修正主義に変質し、最終的には資本主義復活へ進んでいくということになりかねない。「脱文革」が急速に進行するなかで、孔子批判が中国政治の表舞台に再登場してきた背後にはかかる情況があったのである。

しかし、孔子批判は単に革命認識の問題ではなく、明らかに現実政治における権力闘争と結びついていた。それは林彪事件を契機として「批林批孔」運動に発展していったのである。

第四章　「批林批孔」とその目的

第一節　「批林」・「批孔」結合の論理

人民日報が「批林批孔」運動について最初に発表した社説は、一九七四年二月一日の「批林批孔闘争を最後までおし進めよう」であった。それまでの人民日報は、一九七三年八月から孔子批判に関する論文を四〇篇近く掲載していたが、[74] 孔子批判が林彪批判と結合したのはこの社説が初めてであった。

この社説にもとづいて、蔵居良造は「批孔」と「批林」の関連性をつぎの八項目に簡潔にまとめているので、ここでそれを借用する。

㈠孔孟の「己に克ちて礼に復る」にたいし、林彪は「悠々たるかな万事、ただこれを大となす、己に克ちて礼に復る」といっている。それは「プロレタリア独裁をくつがえそうとはやるその野心と資本主義復活を、万事のうちの最も大事なこと」としていたことを示すものである。

㈡孔孟は「生まれながらにしてこれを知る」と鼓吹したが、林彪は自らを「天馬」になぞらえ「天才論」をとなえ、党を乗っ取り、国家権力を奪い、独裁支配を行おうとした。

㈢孔孟の「唯だ上智と下愚は移らず」を林彪は宣伝し、上流階級のものは生まれながらに賢く、下層のものは愚かで身辺の小さいことしか考えないと勤労階級を侮辱した。

㈣林彪は「徳を恃む者は昌え、力を恃む者は亡ぶ」という孔孟の言葉に従って「革命の暴力」を否定し、プロレタリア独裁を攻撃した。

㈤林彪は、孔孟の「中庸の道」は理にかなっているといって、「闘争の哲学」に反対した。

(六)孔孟の「屈をもって伸を求むる」を林彪は処世哲学として、しばらく身をひそめて、野心をのばそうとした。

(七)孔孟の「心を労するものは人を治め、力を労するものは人に治められる」に従って、林彪は肉体労働を卑しめ、「五・七」指示や下放を攻撃した。

(八)孔孟の徒は「他派を排撃して儒家だけを尊いものとした」が、林彪はそれに従って息子に孔子を崇拝させ、その経書を読ませ、「教子経」を与えて、林家世襲王朝をうち立てようとした。[75]

以上の社説に示されたように、一方的に孔孟の思想の一端を羅列し、証拠を示すことなくそれらに林彪を関連づけるだけでは、「批林」と「批孔」が結合せざるを得なかった真の理由が明らかにならない。そこで、両者の関連性とその根底にあった真の狙いを当時の中国国内の政治情況と関連させて究明することにする。

今日文化大革命は、「指導者がまちがってひき起こし、それが反革命集団に利用されて、党と国家と各民族人民に大きな災難をもたらした内乱である」[76]と否定的に評価されている。かかる混乱は当然人民大衆の日常生活に多大な影響を与え、指導者に対する不信を高めることになる。しかも、長期にわたる継続革命という政治闘争によって、人民大衆は相互不信に陥っていた。文革の主役であった紅衛兵は利用価値がなくなるとともに下放され、大多数の幹部は五・七幹部学校で思想の再教育を強要された。このような状態における一般大衆の心情は、おのずと反体制の側に走り易くなり、一つの潮流となるのである。

このような情況との関連において、中国共産党第十回全国代表大会における周恩来の政治報告と王洪文の党規約改正についての報告は注目すべきである。周恩来はその政治報告のなかで、まず人民大衆の継続革命に対する情勢認識の誤ちを正すために、「われわれは依然として帝国主義とプロレタリア革命の時代におかれている」という毛沢東の言葉を強調し、「党内の二つの路線の闘争は長期にわたって存在し、これからさきも十回、二十回、三十回

と起こるであろう」[77]と述べている。ここで周恩来は、それまでの党内闘争の正当性を確認するとともに、社会主義社会における階級闘争の永続性を人びとに納得させようとした。一方王洪文も、党規約改正についての報告で、「われわれはかならず警戒心をたかめ、このような闘争の長期性と複雑性を認識しなければならない」[78]と述べ、階級闘争の長期性と複雑性を強調している。そしてさらに党規約は、社会主義社会における階級闘争の根本的原因である二つの路線の矛盾解決について、「これらの矛盾は、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命の理論と実践によってのみ解決することができる」[79]と明記している。

また、人民大衆の文革に対する消極的な態度を戒めるかのように、今後の任務について、周恩来は、「プロレタリア文化大革命の闘争・批判・改革の任務は、各戦線においてひきつづき深くほりさげて遂行する必要がある。……われわれ全党は当面の有利な時機をしっかりとつかんで、プロレタリア文化大革命の成果を固め、発展させ、各方面の活動をりっぱにおこなわなければならない」[80]と述べている。そして、文化大革命の「成果」を発展させる一環として、「ひきつづき、文学・芸術革命、教育・医療衛生革命をりっぱにおこない、農山村におもむく知識青年にかんする活動をりっぱになしとげ、五・七幹部学校をりっぱに運営し、社会主義の新しい事物を支持しなければならない」[81]としている。しかし、このような呼びかけは、裏を返せば、文革がいままでなんら満足な「成果」をあげることができず、今後にその期待を寄せているということを意味する。換言すれば、継続革命に反対し、文革とその新生事物に反対する人民大衆が多数存在し、文革の「成果」を阻もうとしているということである。

この反対勢力がいまや一つの大きな潮流となり、毛沢東を頂点とする文革派が少数派の窮地に追い詰められている状態を示している。このような事実について周恩来は、「一つの傾向がもう一つの傾向をおおいかくしていて、ある潮流があらわれると多数の人がそれについて走り、ごくわずかの人だけがそれに抗するというようなことは、

歴史上なん回もおこっている。……そして、一つのあやまった傾向が潮のごとくおし寄せてきたときには、孤立することを恐れずに、敢然と潮流にさからい、覚悟をきめて敢然とそれに抗するようにしなければならない[82]」と述べ、当時の国内情勢における反毛沢東路線の勢力がすでに一つの大きな潮流となっていたことをはっきりと認めている。また、王洪文は反潮流について、「路線にかかわること、大局にかかわることであれば、真の共産党員は公につくす心をいだいて、免職をおそれず、党からの除名をおそれず、入獄をおそれず、殺害をおそれず、離婚をおそれず、敢然と潮流にさからわなければならない[83]」と述べ、敢然と潮流にさからう革命精神をもつべきであると強調した。

しかし、敢然と潮流にさからう革命精神だけではまだ不十分で、何が正しい潮流で、何があやまった潮流であるかを見分ける能力が必要であった。そこで、とりわけ世界観の改造が最大の重要事となってくるのである。この点について周恩来は、「全党はマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作と毛主席の著作をまじめに学習し、弁証法的唯物論と史的唯物論を堅持し、観念論と形而上学に反対し、世界観を改造しなければならない。とりわけ高級幹部は、なおさら『まじめに本を読んで学習し、マルクス主義に通じ』なければならず、マルクス主義の基本的理論を把握し、新旧修正主義とさまざまな日和見主義にたいするマルクス主義の闘争の歴史を理解し、毛主席がどのようにしてマルクス・レーニン主義の普遍的真理を革命の具体的実践と結びつけ、マルクス・レーニン主義をうけつぎ、守り、発展させてきたかを理解するようにつとめなければならない[84]」と述べている。さらに彼は、林彪批判を世界観確立のために活用すべきであるとして、「林彪反党集団というこの反面教師を十分に利用して、全党、全軍、全国各民族人民に階級闘争と路線闘争の教育をおこない、修正主義を批判し、ブルジョア世界観を批判して、広範な大衆がわが党の十回にわたる路線闘争のなかから歴史の経験を学びとり、わが国の社会主義革命の時期における階級闘争と二つの路線の闘争の特徴と法則についての認識をふかめ、真のマルクス主義とにせのマル

クス主義を見分ける能力をたかめるようにさせなければならない」[85]と主張した。

以上の中共十全大会における周恩来と王洪文の両報告から、当時の中国国内情勢および人心の動向を推測することができる。すなわち、新中国誕生後、人民の社会主義に対する期待に反して、多大な個人的犠牲を強いられる社会主義革命と社会主義建設は、人民の生活向上の希望を満たすことができなかったばかりか、今後も引き続き継続革命を行わなければならないとなると、毛沢東を中心とした急進派の政策に対し、消極的、非協力的態度が生まれてくることは、容易に想像することができる。他方、党内における度重なる権力闘争も、党内党外を問わず、多くの人々を巻き込み、人心を深く傷つけた。九全大会で劉少奇に対する闘争が一段落したかに見えた直後に、また権力闘争による批陳整風が始まり、そしてその後を追うかのように林彪事件が起こり、批陳整風から批林整風、そして「批林批孔」へと突入したのである。

このような環境において、中国人特有の尚古（古を尚ぶ）[86]精神が機能する可能性が十分にあったことが考えられる。現実の社会に対する失望と不満が、人民大衆をして現実から逃避させ、過去の伝統的な理想社会に幻想を抱かせ、そこに願いを託する心情を芽生えさせたのであろう。

毛沢東にとって、このような潮流の形成は、マルクス・レーニン主義、とりわけ彼の階級闘争を基礎とする社会主義革命観が人民の脳裏に定着していないことを意味すると認識されたに違いない。一九七四年の『紅旗』第六期の「マルクス主義の理論隊列を強化しよう」と題する短評は、「批林批孔は上部構造の分野でマルクス主義が修正主義に打ち勝ち、プロレタリア階級がブルジョア階級に打ち勝つ政治闘争であり、思想闘争である。この闘争のなかで、林彪の反革命修正主義路線を掘り下げて徹底的に批判し、孔孟の道を徹底的に批判し、マルクス主義をもって哲学、歴史、教育、文学、芸術、法律を含む上部構造のすべての分野を占領するには、われわれ全党と全国民は

まだまだこの上なく大きな努力を払わなければならない」[87]と述べている。このことは、共産主義中国が成立してから当時に至るまで、上部構造のすべての分野において、マルクス主義がまだ支配的地位を確立していないことを、中共当局が自ら認めていることである。

それでは、上部構造の各分野においてマルクス主義が充分に確立していないとすると、現に人民大衆の思想を支配していたのは如何なる思想であったのであろうか。一九七四年『紅旗』第二期の「批林批孔闘争を広く深くくりひろげよう」と題する短評は、「搾取階級の伝統的思想、たとえば労働を軽視することや女性を蔑視すること、労働者、農民大衆を見下げること、新しい事物や新しく生まれた力が気に入らないこと、外国を崇拝し、復古をはかること、『裏口取引』のような不正な傾向、これらの搾取階級の思想は、それぞれ社会的、階級的根源があるほか、いずれも孔孟の道にその思想的根源を求めることができる。批林批孔の闘争のなかで、林彪と孔子の反動思想にたいする徹底的な批判をつうじて、その害毒を一掃しなければならない」[88]と述べている。すなわち、毛沢東派にとってマルクス主義を確立する前提条件として、諸悪の根源としての「孔孟の道」を一掃しなければならないということである。そのためにも、マルクス、レーニン、スターリンの著作と毛沢東の著作を「刻苦精読」しなければならなかったのである。[89]

余命の残り少ない毛沢東が一番恐れていたのは、社会主義中国の変質であった。中共十全大会で林彪を正式に断罪したものの、新しい後継者が未定であるばかりか、諸悪の根源としての「孔孟の道」がいまだに一掃されていない状態では、毛沢東の社会主義革命観が受け継がれる保証はなに一つない。林彪批判を引続き拡大・深化させることはこの時期における重大な政治闘争であると同時に、大きな潮流となっていた「孔孟の道」の影響によって形成されたといわれる世界観を徹底的に排除することも、また当面の急務であった。孔子批判は林彪批判の深化であ

り、林彪を徹底的に批判するには、その思想的根源である孔孟の道を批判すべきであるとの毛沢東派の主張は、「批林」および「批孔」を政治的意図のもとで、人為的に結びつけさせた基本的原因の一つであったといえよう。

第二節　闘争の対象

中国で展開された政治運動は、過去の経験からいずれも権力闘争と密接な関係があった。「批林批孔」運動についても「四人組」が打倒された後、中共当局はこの政治運動の「ホコ先は周恩来同志に向けられていた」(90)と主張している。しかし、このような断定の仕方には疑問が残る。確かに劉少奇、陳伯達、林彪などが相ついで打倒された後、文革派と一線を画した実務派の指導者たる周恩来が「批林批孔」運動の闘争の対象となったということは、容易に想像されるところである。しかし、「批林批孔」運動の展開を分析してみると、この運動が始めから周恩来という特定の個人を対象にした権力闘争でなかったことがわかってくるであろう。

そこでまず明らかにしなければならないのは、「批林批孔」運動がいつ準備されたかということである。今日では、一般的に「批林批孔」運動は、一九七三年八月七日『人民日報』に掲載された楊栄国論文「頑迷な奴隷制擁護の思想家—孔子」がこの運動の始まりであるとされている。確かに、楊栄国の論文が発表されてから、中国の宣伝機関は申し合わせたように孔子批判の大運動を展開し始めたのである。しかし、楊栄国論文が発表される前に、明らかに輿論形成を目的とした先駆的論文と著書が数多く発表されている。たとえば、一九六九年の『紅旗』第六・七期合併号には、史反修の「孔家店の幽霊と現実の階級闘争」が、上海の『解放日報』から転載されていた。そして一九七二年五月には、洪世滌の著書『秦始皇』が上海人民出版社から出版され、ほぼ同じ時期に、一〇年前に出版された『中国歴史哲学文選』が『中国哲学史資料簡編』と改題され、新たに出版された。さらに、同年第七期の

『紅旗』には、郭沫若の「中国古代史の時期区分問題」が発表された。一九七二年十一月になると、北京大学哲学史組の『哲学史上の先験論』が『学点歴史』叢書として人民出版社から出版され、楊栄国は同年第十二期の『紅旗』に「春秋戦国時代の思想領域における二つの路線闘争—儒法論争からみた春秋戦国時代の社会変革」なる論文を発表した。一九七三年六月になると、楊栄国の旧著『中国古代思想史』が改訂を加えたのち人民出版社から再版され、七月には楊栄国主編の『簡明中国哲学史』が同じく人民出版社から出されている。(91)

このように、一九七三年八月七日の楊栄国論文が発表される前に、大規模な孔子批判運動の下準備はすでに着々と進められていたことがわかる。この事実から考えると、この度の孔子批判運動は一九六九年四月の中共九全大会後からすでに展開され、当初批判の対象となっていたのは、むしろ毛沢東路線に反対して修正主義路線をあゆむ劉少奇であったと思われる。その後、一九七〇年九月の九期二中総会で陳伯達が失脚すると「批陳整風」が、一九七一年九月林彪事件が起こると「批修整風」が始まり、十全大会後になって「批林整風」が展開され、一九七四年二月からは「批林」と「批孔」が結合されるようになったのである。このように、一方で特定個人に対する闘争が展開されるなかで、他方では孔子批判の運動が同時に進行していたということである。このように初期の孔子批判は、必ずしも周恩来個人を対象にした政治闘争ではなかったと言える。

それでは、楊栄国論文が発表され、孔子批判運動が全面的に展開された後、闘争の対象が果たして周恩来であったのかどうかの問題を検討することにする。この問題を明らかにするためには、この時期における周恩来の国内外の政治における位置づけをはっきりさせなければならない。周知のように、楊栄国論文が発表されてから数週間後の一九七三年八月二十四日から中共十全大会が開催された。周恩来はこの大会ではじめて政治報告を行い、彼の政治生活の上で最も輝かしい一頁を残した。また、林彪事件の教訓を汲み取るという形で、毛沢東を頂点とした党最

高の権力機構は集団指導体制をとることになった。周恩来は五人の党副主席のなかで筆頭に位置し、毛沢東主席に次ぐ、名実ともにナンバー2の地位を獲得した。そして、文革と林彪事件の後始末、党と国家再建の客観的要請のもとで、多くの旧幹部が復活した。他方急進派も、文革と林彪粛清を通じて、党中央の権力機構内に勢力を拡大してきた。[92] そのなかでも、特に異例の人事ともいうべきは、この大会で党規約改正報告を行った王洪文の党副主席への就任であった。王洪文の急速な昇進は、「老年・中年・青年の三結合」による後継者養成という方針の象徴であったとしても、そこには毛沢東の人事面における大きな影響力が働いていたと思われる。それと同様に、周恩来の十全大会におけるナンバー2の地位も、彼個人の党内における名声、行政能力および当時の客観的情勢の要求に答えたものであったとしても、毛沢東の支持なしにはありえなかったといえる。孔子批判運動が正式に展開された時点で、周恩来個人が政治闘争の対象であるなら、その運動をみずからおこし、指導した毛沢東は、おそらく周恩来をナンバー2の地位につかせなかったであろう。周恩来は孔子批判運動が激しく展開されていた一九七四年一月四日、中国訪問の大平外相との会見の直前におこなわれた日本人記者団との談話のなかで、「現在われわれの行っている孔子批判について、みなさんは意見が違うようだ。しかし、われわれはもう五十年以上も孔子批判をやっている。一九一九年以来だ。みなさんは、魯迅の『孔家店』批判を知っているでしょうが、日本の学者もやがてわれわれの正しいことに同意するでしょう。みなさんもよく研究してはどうですか」[93] と述べている。老練な政治家として定評のある周恩来が、自分を打倒の対象としている批孔運動に気付かず、その正当性を擁護する発言はしないであろう。同年二月二十四日、周恩来はカウンダ・ザンビア大統領の送別宴の席上、こん度は「批林批孔」運動についてつぎのように述べている。「林彪、孔子はいずれも歴史の歯車を逆転させようとした反動派である。この闘争は批林整風運動の継続と深化であり、プロレタリア文化大革命の偉大な成果を強固にし発展させ、プロレタリア階級

独裁を強固にし、資本主義の復活を防止するうえで、きわめて大きな現実的意義および深遠な歴史的意義を持っている」[94]と。すなわち、この時点における周恩来は、「批林批孔」運動の闘争目的を「批林整風運動の継続、深化」であると見なしていたのである。

党中央の人事についていま一つ注目すべきことは、文革期間中に「資本主義の道を歩む第二の実権派」として批判され、失脚した鄧小平が復活したことである。鄧小平の突然の復活と権力中枢への急速な上昇は、「絶対的権力をもつ毛沢東以外にはできないことであった。」[95]この事実を裏づけるかのように、中共の公式文献も「一九七五年、周恩来同志が重病に倒れると、鄧小平同志が毛沢東同志の支持のもとに中央の日常活動を主宰することになった」[96]と述べている。かかる毛沢東の措置の背後にあった動機としては、周恩来の高齢と病気のために同首相を補佐する強力な指導者を必要としたこと以外に、文革中に異常なまでに軍幹部が党・政界に進出した状態を正常にもどすこと、党が軍を統御する体制を整えること、党の一元的指導を強化することなどがあげられるであろう。[97]かかる当時の客観情勢から毛沢東が鄧小平をこのように必要としていたのであるから、鄧小平よりも影響力を発揮できる周恩来を「批林批孔」運動の批判の対象にすることは到底考えられないのである。

つぎに外交面についてみると、一九七〇年代における中ソ関係の一層の悪化により、中国の対外政策も大きな転換を迫られていた。周恩来の国際社会における個人的声望と潜在的影響力は、西側諸国との関係改善を推進するうえで不可欠であった。事実、この時期に周恩来が中国と西側諸国との関係改善に果たした役割は高く評価すべきものである。今日においてもその正当性が認められている毛沢東の「革命外交」[98]を一手に引き受けた当時の周恩来を打倒の対象とする矛盾はありえないであろう。たとえ「四人組」がこのような対外政策に不満を抱いていたとしても、毛沢東が好んでニクソン大統領やキッシンジャー補佐官など西側諸国の首脳と会談を望んでいることを取りつ

ぐ周恩来をどうすることもできなかったのである。また、毛沢東が「革命外交」を推進するうえで病身と高齢の周恩来に代わる「後継者」を積極的に養成しようとしていた事実は、一九七四年四月鄧小平の第六回国連特別総会出席に際し北京空港でみられたあの歓送迎の異常なまでの熱烈さ[99]がすべてを物語っているように思われる。要するに、この時期における周恩来と鄧小平は、「革命外交」を展開しようとしている毛沢東にとって、掛け替えのない存在であったと言えよう。したがって、この時期における「批林批孔」運動の闘争目標は決して周恩来を特定したものではないと言えるのである。

それでは、「批林批孔」運動の対象として、周恩来を完全に除外してよいのであろうか。私は必ずしもそのようには考えない。その理由は以下の通リである。すでに述べたように、毛沢東は彼の社会主義革命路線に反する修正主義路線の一つの思想的根源を孔孟の道のなかに求めていた。そして、毛沢東は「批林批孔」運動の目的を「マルクス主義で上部構造の各領域を占領し、プロレタリア階級独裁をうち固め、資本主義の復活を防いで、社会主義の祖国を永久に変色させないよう努力する」[100]ことであると考えていた。周恩来が正真正銘の尊孔派であるか否かは別として、彼が文革期に毛沢東の社会主義革命路線の基本である暴力革命に対し、どちらかと言えば消極的な態度をとっていたことは周知の事実である。人物評価を単純に二分法でする毛沢東派からすれば、周恩来のこのような態度は当然味方と考えることはできないが、かといって反動分子として政治闘争の対象にするにも論拠を欠いていた。しかし、「批林批孔」運動が上部構造の改革を一つの目的としている以上、毛沢東派を除くすべての中国人民はこの政治運動の対象となる可能性をもっていたのである。この意味で、「批林批孔」運動を権力闘争の観点から見るなら、当時の周恩来は決して闘争の対象ではなかったが、思想闘争の観点から見るなら、彼は対象のなかに含まれざるを得なかったのである。

第五章　結　語

以上の分析を通して明らかになったことは、この度の「批林批孔」運動の意図するものは、毛沢東派が毛沢東路線に反対する林彪を孔孟の徒として批判し、彼を非マルクス主義者として断罪することによって、毛沢東の階級闘争を基礎とする社会主義革命観の正当性を強調することであったといえよう。また、この運動は毛沢東派を除く全中国人民を対象とした上部構造の改革を目的とした思想闘争の意味を含むものでもあったと思われる。

このように、毛沢東路線に反対する者を孔孟の徒として批判せざるを得なかった事実から考えるなら、中共政権が成立してから「批林批孔」運動の時期に至るまで、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想に対抗する思想として、中国伝統の儒教思想がいまだに根強く中国に残存し、かなりの影響力をもっていたということである。林彪の反動的思想の根源を孔孟の道に求め、それによって形成されたブルジョア世界観が、いまだに改造されていないことが、毛・林対立の根本的原因であったと毛沢東派が主張していることは、このような事実を裏付けるものである。

毛沢東が林彪に課した罪状と毛沢東派によって発表された林彪の毛沢東個人およびその路線に対する批判を照らし合わせてみると、歴史的人物に対する評価、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命に対する認識、文化大革命の中共政権における位置づけおよび政治指導者としての道徳観などに関する毛・林の対立は、いずれも伝統的孔孟の道に依拠するか否かの世界観の相違によるものとなっている。それゆえに、毛沢東としては、社会主義社会を永久に変質させないためには、どうしても孔孟の思想を徹底的に批判し、その「毒害」を一掃しなければならなかった。また、毛沢東自身が孔孟の道の影響を受けていたからこそ、この任務の重大性を誰よりも痛感していたので

ある。「脱文革」が急速に進行しているこの時期に、孔子批判が中国政治の表舞台に再登場してきた背景にはかかる一つの基本的原因があったのである。

また、中共政権成立以来、社会主義革命と社会主義建設は、人民大衆の生活向上の要望を満たすことができなかったばかりか、党内における度重なる権力闘争は、多くの人々を巻き込み、人心を深く傷つけた。人民大衆の失望と不満が、党と指導者に対する信頼を著しく低下させ、反体制の大きな潮流を形成した。毛沢東派は、このような「誤った」潮流を、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想が人民大衆の上部構造を完全に支配していないとみなし、それは中国伝統の孔孟の道がその浸透を阻んでいたことに起因するものであると考えた。十全大会は林彪を断罪した大会であった。後継者問題に失敗した毛沢東にとって、林彪派残存勢力の徹底的排除を目的とした林彪批判運動はもとより、孔孟の道によって支配されている人民大衆の上部構造の改革もまた当面の急務であった。林彪の反党・反毛沢東路線の思想的根源を孔孟の道の影響によるものであると規定し、林彪批判を拡大・深化させるにはその思想的根源である孔孟の道を批判すべきであるとの毛沢東派の主張は、そのまま「批林」と「批孔」を人為的に結びつかせた一つの基本的原因でもあったのである。

確かに中国国内で展開される政治運動は、常に権力闘争と密切な関係がある。しかし、この度の「批林批孔」運動がはじめから周恩来を対象にした権力闘争であると断言するには、あまりにも多くの疑問がある。「四人組」が打倒された後、「左」傾路線が批判されるなかで行われた十一期六中総会での「歴史的決議」のなかでは、「批林批孔」運動のホコ先は「四人組」が周恩来を闘争の対象とした政治運動であったと記されている。しかし、本稿の分析から見る限りでは、この運動の目的は周恩来個人を対象にした権力闘争であるというよりは、むしろ毛沢東派を除くすべての中国人民の上部構造の改革を目的とした思想闘争であったという面が強かったというべきであろう。

「批林批孔」運動は、中共党宣伝機関を総動員した一大キャンペーンであったにもかかわらず、この運動が始まって間もない時期に、中共当局は運動の失敗を暗に認め[101]、かつ一年余で明確な「成果」をおさめることなく収拾せざるをえなかった。この事実から、中国における孔孟の思想の根強さ、人民大衆の孔子批判に対する間接的抵抗の激しさを窺い知ることができる。この意味において、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を基礎とする中国の社会主義制度が、中国の人民大衆に完全に受け入れられるまでには、今後ともひきつづきこの大地に生まれ育った儒教の伝統思想と限りない闘争が展開されることになるであろう。

（1）一九七三年十二月八日付の『朝日新聞』は、「中国で第二の文革進む」という見出しで、中国国内で展開されていた「批林批孔」運動を報道した。

（2）一九七三年八月に行われた林彪処断のための中共十全大会後に孔子批判が大々的に展開された。翌七四年二月に「批林」と「批孔」が正式に結びつき、「批林批孔」運動としてその深化と拡大がはかられたが、七五年一月の第四期全国人民代表大会を転機として、急速にその影をひそめていった。このように「批林批孔」運動は、わずか一年余りで、いかなる「成果」もおさめることなく、収拾せざるを得なかったのである。

（3）「関於建国以来党的若干歴史問題的決議—一九八一年六月二十七日中国共産党第十一届中央委員会第六次全体会議一致通過」『人民日報』、一九八一年七月一日。邦訳、『北京周報』、一九八一年、二七号、二三頁。

（4）「批林批孔闘争を最後までおし進めよう」—『人民日報』社説、一九七四年二月二日（『孔子批判』、東方書店、一九七四年、一〇頁）。

（5）「『克己復礼』—資本主義復活をたくらんだ林彪の反動綱領—を批判する」—『人民日報』社説、一九七四年二月二〇日（前掲『孔子批判』、二八頁）。

（6）「関於建国以来党的若干歴史問題的決議—一九八一年六月二十七日中国共産党第十一届中央委員会第六次全体会議一致通過」、前掲論文。邦訳、二二頁。

（7）加藤栄治『周恩来なき中国の潮流』、日中出版、一九七六年、七頁。

（8）「中国共産党章程（中国共産党第九次全国代表大会一九六九年四月一四日通過）」—『紅旗』、一九六九年第五期、三四頁。

（9）「中共中央中発（一九七三）三四号文件（全文）—中共中央専案組『関於林彪反党集団反革命罪行的審査報告』」（袁悦編『林彪事件原始文件彙編（増訂本）』、中国大陸問題研究所出版、一九七六年、一五一頁）は、「党の九期二中総会で、林彪反党集団が党にかけてきた突然の襲

撃は、予め準備をめぐらせていたものであった」（邦訳、武内香里、森沢幸『中国の政治と林彪事件』、日中出版、一九七六年、二五〇頁）と述べている。

(10) 「中国共産党第九届中央委員会委員和候補委員二百七十九人名単」—『紅旗』、一九六九年第五期、四九頁。

(11) 陳綏民『毛沢東与江青』、台北・新亜出版社、一九七六年、七一頁。

(12) 「中共中央中発（一九七二）二四号（全文）—粉砕林彪反党集団反革命政変的闘争（材料之三）」、袁悦編、前掲書、一三八—一三九頁。

(13) 「中共中央中発（一九七三）三四号文件（全文）—中共中央専案組『関於林彪反党集団反革命罪行的審査報告』」、袁悦編、前掲書、一五二頁。邦訳、二五一頁。

(14) 周恩来「在中国共産党第十次全国代表大会上的報告—一九七三年八月二十四日報告、八月二十八日通過」—『人民日報』、一九七三年九月一日。邦訳、『北京周報』、一九七三年、三五・三六号、二二頁。

(15) 「紅旗雑誌社、有関『十大』問題答客問」—『中華月報』、一九七四年、九月号、二八頁。

(16) 北京大学・清華大学大批判グループ「林彪と孔孟の道」—『批林批孔論文集』、北京・外文出版社、一九七五年、六〇頁。

(17) 王洪文「関於修改党章的報告—一九七三年八月二十四日在中国共産党第十次全国代表大会上報告、八月二十八日通過」—『人民日報』、一九七三年九月二日。邦訳、『北京周報』、一九七三年、三五・三六号、三七頁。

(18) 林彪の罪状はすべての批林文件に散見されており、枚挙にいとまがない程多い。その中でも、「中共中央中発（一九七二）二四号（全文）—粉砕林彪反党集団反革命政変的闘争（材料之三）」（袁悦編、前掲書、一三五—一四四頁）は、林彪の反毛沢東犯罪の証拠を約五十種類列挙し、「これらの罪証は調査によって確認された一部分である」と述べている。

(19) 周恩来、前掲報告。邦訳、二〇頁。

(20) 「中共中央中発（一九七三）三四号文件（全文）—中共中央専案組『関於林彪反党集団反革命罪行的審査報告』」、袁悦編、前掲書、一五一頁。邦訳、二五〇頁。

(21) 同右、一五二頁。邦訳、二五一頁。

(22) 同右、一五一頁。邦訳、二五一頁。

(23) 同右、一五一頁。邦訳、二五一頁。

(24) 「『克己復礼』—資本主義復活をたくらんだ林彪の反動綱領—を批判する」—前掲『人民日報』社説、（前掲『孔子批判』、二六頁）。

(25) 俞彤「鞏固無産階級専政的綱領—学習『論人民民主専政』」—『紅旗』、一九七三年第十二期、七頁。

(26) 唐暁文「孔子を痛罵した柳下跖」—前掲『批林批孔論文集』、三三四頁。

(27) 同右、三三五頁。

(28) 上海自動化儀表一廠一車間中車組「孔子的『仁』就是吃人」—『学習与批判』、一九七四年第二期、一四頁。

(29) 余凡「林彪反革命策略の破産—黒いノートを批判する」—前掲『批林批孔論文集』、八五頁。
(30) 北京市総工会理論小組「労働者階級は『中庸』に反対する」—『北京周報』、一九七四年、三五号、一二頁。
(31) 求新造船廠銅工鬘管小組「鬪則進、不鬪則退—斥『両鬪皆仇、両和皆友』」—『学習与批判』、一九七四年第二期、一二頁。
(32) 首鋼石景山鋼鉄公司煉鋼廠工人理論組「満腔熱情地支持革命的新生事物—学習馬克思対待巴黎公社的態度」—『歴史研究』、一九七六年第一期、四五頁。
(33) 哲軍「孔子の中庸の道は社会変革に反対する哲学である」—前掲『批林批孔論文集』、一二七頁。
(34) 池恒「発展社会主義的新生事物」—『紅旗』、一九七四年第十二期、六頁。邦訳、『北京周報』、一九七四年、五一号、一五頁。
(35) 周恩来、前掲報告。邦訳、二二頁。
(36) 燕楓「孔丘的仁義道徳与林彪的修正主義路線」—『紅旗』、一九七四年第六期、一二頁。邦訳、『北京周報』、一九七四年、二九号、一〇頁。
(37) 「五七一工程紀要」を入手し、いち早く世にそれを公表した台湾当局の中共専門家ですら、同紀要が本当に林彪の手によって作成されたのであるかについて疑問を持っていた。たとえば、侯家国は「林彪事件から見た中共内部政治情勢」（『問題と研究』、問題と研究出版、一九七三年、二月号、九六頁）という論文のなかで、「五七一工程（紀要）が本物かどうかについては疑問がある」と言っている。また、項迺光も「林彪の謀反と中国共産党」（『問題と研究』、一九八一年、十二月号、四一頁）という論文のなかで「これ（『五七一工程紀要』）は林彪がつくった計画書ではない、と筆者は判断している。それは極めて幼稚な文書だからである」と述べている。わが国でも林彪が「五七一工程紀要」の作成に直接参加あるいは指揮したという点には疑問があるとの見解をとっている学者が大部分であるが、「この文書は、林彪自体がつくったものではなく、林彪の陰謀計画に参加した軍幹部たちの証言から構成されたものであるが、その反毛的内容から見て江青ら文革派によって積極的に林彪批判の宣伝文書として配布されたとは考えられない。林彪批判の形をとった毛沢東批判文書として、実務派の手で宣伝されたと思われる」（柴田穂「十全大会と批林批孔に見る中共のリーダーシップ」—『問題と研究』、一九七四年、九月号、三七頁）と、大胆な仮説を展開するものもあった。また、「五七一工程紀要」を林彪グループが作成したものではなく、「新しい『反毛グループ』によって偽造された」（ユルガン・ドメス「林彪事件からの連想—一人の後継者の死亡と一回のテストの失敗—」—『問題と研究』、一九七四年、五月号、八六頁）という、香港に逃げてきた紅衛兵から聴いた話として伝えているのもあった。
(38) 「中華人民共和国最高人民法院特別法廷判決書—特法字第一号」—『人民日報』、一九八一年一月二十六日。
(39) 余凡、前掲論文、八二頁。
(40) 同右、八二頁。
(41) 「中共中央中発（一九七四）一号文件（全文）—北京大学、清華大学選編『林彪与孔孟之道』（材料之一）」、袁悦編、前掲書、一六七頁。
(42) 同右の文献はつぎの八項目に分れている。㈠效法孔子「克己復礼」、妄図復辟資本主義、㈡鼓吹「生而知之」的天才論、陰謀篡党奪権、㈢宣揚「上智下愚」的唯心史観、悪毒誣蔑労働人民、㈣宣揚「徳」、「仁義」、「忠恕」、攻撃無産階級専政、㈤販売「中庸之道」、反対馬克思主

義的闘争哲学、(ハ)用孔孟反動的処世哲学、結党営私、大搞陰謀詭計、(ヒ)鼓吹「労心者治人、労力者治於人」的剝削階級思想、攻撃「五・七」道路、(フ)教子尊孔読経、夢想建立林家世襲王朝。総ページ数は二四頁にのぼるかなり長いものである。

(43) 「批林批孔関係年表」—前掲『孔子批判』、二一九—二二六頁。

(44) 蕭三『毛沢東同志的青少年時代』、新華書店、一九五〇年、一〇頁。

(45) 佐藤慎一郎は、その論文「批林批孔揚秦運動」(『中国関係論説資料一六、一九七四年、第四分冊(上)、六三頁)のなかで、「毛沢東はその著作『毛沢東選集』四冊の中で、マルクスの言葉を六回、エンゲルスの言葉を四回抽象的に引用しているが、毛沢東思想の骨格をなすと見られている部分では、孔孟の儒家思想から二十六回、老荘から四回引用している」と述べている。

(46) 武内香里、森沢幸、前掲書、二四二頁。

(47) 毛沢東「民族戦争における中国共産党の地位」—『毛沢東選集』第二巻、北京外文出版社、一九六八年、二七九頁。

(48) 石侖「発揚『五四』精神、深入批林批孔」—『学習与批判』、一九七四年第五期、五頁。

(49) 毛沢東「青年運動の方向」—前掲『毛沢東選集』、三二九—三三〇頁。

(50) 毛沢東「新民主主義論」—前掲『毛沢東選集』、五〇七—五〇八頁。

(51) 魯萱、周今「史上に比類のない社会主義」—『北京周報』、一九七四年、三七号、三一頁。

(52) 「春節における談話の要点—一九六四年二月十三日」—『毛沢東思想万歳』(下)、(東京大学近代中国史研究会訳)、三一書房、一九七五年、九一頁。

(53) 「哲学の問題についての講話—一九六四年八月十八日」—前掲『毛沢東思想万歳』(下)、二〇五頁。

(54) 『毛沢東一九三六年同斯諾的談話—関於自己的革命経歴和紅軍長征等問題』、人民出版社、一九七九年、三六頁。

(55) スチュアート・シュラム『毛沢東』、石川忠雄、平松茂雄訳、紀伊国屋書店、一九六七年、七頁。

(56) 蕭三、前掲書、八頁。

(57) 玄黙「中共対孔子的評価及其全面『批孔』運動的政治目的」(上)—『中共研究』、一九七三年、第七巻第十一期、一八頁。

(58) 「関於建国以来党的若干歴史問題的決議—一九八一年六月二十七日中国共産党第十一届中央委員会第六次全体会議一致通過」、前掲論文。邦訳、二〇頁。

(59) 毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」—前掲『毛沢東選集』第五巻、一九七七年、六〇一—六〇二頁。

(60) 「社会主義の歴史的段階における党の基本路線」—『北京周報』、一九七四年、四一号、二八頁。

(61) 洪宇「歴史是螺旋式発展的」—『紅旗』、一九七四年第一〇期、一一頁。

(62) 方海「正確認識路線闘争的長期性—学習『矛盾論』的一点体会」—『学習与批判』、一九七三年第三期、三頁。

(63) 方海、前掲論文、四頁。

(64) 師皇「『批儒評法』是仮、篡党奪権是真」―『紅旗』、一九七七年第一期、一〇九頁。
(65) 方海「無産階級政党是在両條路線闘争中発展的―学習恩格斯致倍倍尓的信的一点体会」―『学習与批判』、一九七三年第二期、七頁。
(66) 姫田光義は著書『中国現代史の争点』（日中出版、一九七七年、一六五頁）のなかで、「われわれの理解にしたがえば、言葉の厳密な意味での、歴史的概念規定としての、敵対的な『階級』や『階級闘争』は現実の中国には存在しないし、したがって同様な意味において『革命』なるものも存在しない」と述べている。
(67) 史文「対反動階級決不施仁政」―『安徽師範大学学報』、一九七六年第二期、五〇頁。
(68) 毛沢東「人民民主主義独裁について」―前掲『毛沢東選集』第四巻、五五〇頁。
(69) 毛沢東「湖南省農民運動の視察報告」―前掲『毛沢東選集』第一巻、二六頁。
(70) 毛沢東「延安の文学・芸術座談会における講話」―前掲『毛沢東選集』第三巻、一二三頁。
(71) 田力「孟子―奴隷制復活の鼓吹者」―『北京周報』、一九七四年、三七号、一九頁。
(72) 龔杰「陳独秀和孔老二」―『学習与批判』、一九七四年第四期、一三頁。
(73) 『マルクス・エンゲルス八巻選集』第二巻、大月書店、一九七三年、八五頁。
(74) 加藤栄治、前掲書、一七頁。
(75) 蔵居良造「『批林批孔』の論理と政治」―『中国関係論説資料』（一七）、一九七五年、第四分冊（下）、二二一頁。
(76) 「関於建国以来党的若干歴史問題的決議―一九八一年六月二十七日中国共産党第十一届中央委員会第六次全体会議一致通過」、前掲論文。邦訳、二二頁。
(77) 周恩来、前掲報告。邦訳、二三―二五頁。
(78) 王洪文、前掲報告。邦訳、三七頁。
(79) 「中国共産党章程―中国共産党第十次全国代表大会一九七三年八月二十八日通過」―『人民日報』、一九七三年九月二日。邦訳、『北京周報』、一九七三年、三五・三六号、三一頁。
(80) 周恩来、前掲報告。邦訳、二八頁。
(81) 周恩来、前掲報告。邦訳、二九頁。
(82) 周恩来、前掲報告。邦訳、二四頁。
(83) 王洪文、前掲報告。邦訳、三八頁。
(84) 周恩来、前掲報告。邦訳、二九頁。
(85) 周恩来、前掲報告。邦訳、二八―二九頁。
(86) 森三樹三郎は、その著書『中国思想史（上）』（第三文明社、一九七八年、四〇頁）のなかで、「よく中国人は古代尊重論者だといわれる。

いつでも理想を過去におき、堯、舜を理想の聖王として仰いでやまない。それは中国人の性癖ともいえるものであるが、他面では理想と現実を連続の関係におくところから出たともいえる。理想を過去の歴史のある時点におけば、その理想はかつて一度実現されていたことの証明になり、現実性を保証されることになる」と述べている。また、山口察常は「支那民族否東洋全般の民族ともいひ得るが、何れも所謂尚古の風を有ってゐて、吾より古をなすことを憚るのが常である」(『支那思想、哲学思想、孔子の思想とその後継末流』『東洋思想』、『岩波講座、第六巻、一一五頁)と述べている。さらに、村松暎は『中国三千年の体質―孔子から現在まで』(高木書房、一九八〇年、二二―二三頁)のなかで、「中国人は、人間にせよ事件にせよ、それが過去のものとなって、はじめて評価が定まり、現在の事物を判断する場合の基準になり得ると考えたのである。……そこで、古を尚ぶという傾向が出て来る。昔の前例を模範として、これに倣うのである」と述べている。このように中国人独特の民族性に尚古の精神があったことを一致して認めている。

(87) 「加強馬克思主義的理論隊伍」―『紅旗』、一九七四年第六期、五頁。

(88) 「広泛深入開展批林批孔的闘争」―『紅旗』、一九七四年第二期、七頁。

(89) 一九七四年十一月二十八日の『人民日報』社説「継続搞好批林批孔」は、「当面、われわれはおもな注意力を学習と批判の面にそそぎ、まじめに本を読み、学習する自覚をいっそう高め、広はんな幹部と大衆を組織して、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作と毛主席の著作を刻苦精読しなければならない」(邦訳、『北京周報』、一九七四年、四九号、九頁)と述べている。

(90) 「関於建国以来党的若干歴史問題的決議―一九八一年六月二十七日中国共産党第十一届中央委員会第六次全体会議一致通過」、前掲論文。邦訳、二二頁。

(91) これらの著書、論文、著者、出版社および掲載期日は、鐘華敏「『反孔』、『反潮流』剖析」(『中華月報』、一九七三年、十二月号、一八―一九頁)、汪学文「中共の孔子批判の背景とその発展」(『問題と研究』、問題と研究出版、一九七四年、三月号、八二頁)、「批林批孔運動主要参考資料目録」(前掲『孔子批判』、二二九―二三〇頁)などを参考に、出版された時期にしたがって整理したものである。

(92) 「関於建国以来党的若干歴史問題的決議―一九八一年六月二十七日中国共産党第十一届中央委員会第六次全体会議一致通過」(前掲論文。邦訳、二二頁)はつぎのように述べている。「第十回党大会は第九回党大会の左よりの誤りをうけつぎ、王洪文を党中央副主席のポストにつけた。また、江青、張春橋、姚文元、王洪文が中央政治局で「四人組」を結成し、江青反革命集団の勢力をいっそう強めることになった。」

(93) 『読売新聞』、一九七四年一月五日。

(94) 『朝日新聞』、一九七四年二月二十五日。

(95) 大久保泰はその論文「鄧小平起用の背景とリーダーシップの交替期」(『問題と研究』、問題と研究出版、一九七五年、新年号、五五頁)の中で、鄧小平が異例の手続きによって中央政治局委員に復帰したのは、「絶対的権力をもつ毛沢東以外にはできないことであろう」と述べている。

(96) 「関於建国以来党的若干歴史問題的決議―一九八一年六月二十七日中国共産党第十一届中央委員会第六次全体会議一致通過」、前掲論文。

邦訳、二三頁。

(97) 大久保泰、前掲論文、五五―五六頁。

(98) 「関於建国以来党的若干歴史問題的決議―一九八一年六月二十七日中国共産党第十一届中央委員会第六次全体会議一致通過」（前掲論文。邦訳、二三頁）はつぎのように述べている。「かれ（毛沢東）は晩年、わが国の安全を守ることに依然として鋭い注意を向け、社会帝国主義の圧力をはねかえし、正しい対外政策を実行し、各国人民の正義の闘争を断固支援するとともに、三つの世界の区分についての正しい戦略と、わが国が永遠に覇をとなえないという重要な思想を提起した。」また、毛沢東の晩年における外交政策の急転を中共当局は「革命外交」と称していた。

(99) 一九七四年四月七日の『人民日報』は一面トップで、鄧小平の国連特別総会出席の北京空港での盛大な歓送風景を写真入りで報道した。当日空港まで見送りに行かれた顔ぶれは、「党と国家の指導者周恩来、王洪文、葉剣英、江青、姚文元、李先念、陳錫联、紀登奎、華国鋒、汪東興、呉徳、蘇振華、倪志福、徐向前、聶栄臻、李富春、阿沛・阿旺晋美、政治協商会議全国委員会副主席許徳珩と首都人民大衆約四千余人」であった。すなわち、毛沢東を除くすべての党・政首脳と人民大衆が総動員され、外国元首歓送の風景とまったく同じ盛大ぶりであった。また、鄧小平帰国時の歓迎では、歓送時に姿を見せなかった張春橋も加わっていた。

(100) 「在社会主義大道上前進」―『人民日報』、『紅旗』雑誌、『解放軍報』共同社説、一九七四年十月一日。邦訳、『北京周報』一九七四年、四〇号、一六頁。

(101) 一九七四年四月五日付『人民日報』に転載された同年第四期『紅旗』巻頭の短評「注意総結経験」が引用している毛沢東のつぎの言葉は、中共自身が運動の失敗を暗に認めていることを示唆するものである。「われわれの工作中の主な経験を総括するに当っては、その成功の経験ばかりでなく失敗、誤りの経験をふくまねばならず、その有益な経験はそれを推し広め、失敗の経験からは教訓を学びとるべきだ。」